

2019年横浜ナザレン教会
聖霊降臨節第九主日礼拝(平和主日礼拝)
詩編115、ルカ福音書11:1～4

【聖書】

詩編115

詩篇 115:1 わたしたちではなく、主よ／わたしたちではなく／あなたの御名こそ、栄え輝きますように／あなたの慈しみとまことによって。2 なぜ国々は言うのか／「彼らの神はどこにいる」と。3 わたしたちの神は天にいまし／御旨のままにすべてを行われる。4 国々の偶像は金銀にすぎず／人間の手が造ったもの。5 口があっても話せず／目があっても見えない。6 耳があっても聞こえず／鼻があってもかぐことができない。7 手があってもつかめず／足があっても歩けず／喉があっても声を出せない。8 偶像を造り、それに依り頼む者は／皆、偶像と同じようになる。

9 イスラエルよ、主に依り頼め。主は助け、主は盾。10 アロンの家よ、主に依り頼め。主は助け、主は盾。11 主を畏れる人よ、主に依り頼め。主は助け、主は盾。12 主よ、わたしたちを御心に留め／祝福してください。イスラエルの家を祝福し／アロンの家を祝福してください。13 主を畏れる人を祝福し／大きな人も小さな人も祝福してください。14 主があなたたちの数を増してくださるように／あなたたちの数を、そして子らの数を。15 天地の造り主、主が／あなたたちを祝福してくださるように。

16 天は主のもの、地は人への賜物。17 主を賛美するのは死者ではない／沈黙の国へ去った人々ではない。18 わたしたちこそ、主をたたえよう／今も、そしてとこしえに。ハレルヤ。

ルカ福音書11:1～4

11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。4 わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を 皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

1 聖書は人間をよく知っている

聖書は、人間をよく知っています。人は天使のようにもなれるし、悪魔のようにもなれる、素晴らしい知恵を出して命を輝かせることもできれば、人を憎み破滅をもたらすこともある。聖書は、そんな人間の本質的な姿を歴史物語、詩編、預言書、知恵の言葉など様々なジャンルの文学を用いて描きだしています。

なぜ、聖書は人間の本質を描き出すことができるのでしょうか。それは、聖書が神と人との関係を描いているからではないでしょうか。「神から見れば人間はどういうふうに見えるのか？」が描かれているから、人間の側から見ただけでは分からない、本当の姿が見えてくるのだと思います。

先週の礼拝から、ルカによる福音書は、イエスさまが弟子たちに主の祈りを教える場面に入りました。主が教えてくださった祈りの冒頭「父よ、御名を崇めさせ給え」という願いにも、人間をよく知っている聖書の知恵が背後にあります。「自分たちの名前を崇めるのではなく、大きくするのではなく、自分たちとは全く違う全世界を造られた唯一の方の名を崇め大きくしてください。」との祈り、主の祈りの最初の言葉は、今日のもうひとつの聖書箇所、詩編 115 篇の冒頭の印象的な祈りと響き合っています。

2 バビロン捕囚

その詩編115篇の背景には、「バビロン捕囚」という神の民の屈辱的な歴史的出来事があるのですが、先ず、イスラエル、神の民の歴史を簡単になぞってみたいと思います。皆さんは、イスラエルの人々が「自分たちは神に導かれた神の民だ」と自覚した決定的な出来事はなんだとお思いでしょうか。聖書に親しんでいる人は、“アブラハム”という名前が出てくるかもしれません。神はアブラハムをお選びになり、「あなたを諸国民の父とする」と約束されました。イスラエルの人々は、このアブラハムの子孫であることを誇りにしていると福音書にも出てきます。確かに「アブラハム」は私たちの信仰の父とも言えるでしょう。しかし、イスラエルが「自分たちは神に導かれる民だ」という共同体としてのアイデンティティを確立したのは、アブラハムではなく、「出エジプト」の出来事を通してであったと言われています。紀元前1300年頃、いつ滅んでもおかしくない弱小民族のイスラエルは、大帝国エジプトで奴隷として虐げられ、ファラオに迫害され絶滅の危機に陥っていました。そこで、神はモーセを指導者として立て人々をエジプトから脱出させます。イスラエルの人々は、神に導かれ、荒野の四十年の後、約束のカナンの地に入り、定住しました。しかし、そのような救いの出来事を経験したにも拘らず、彼らはたちまち神に背きます。神は幾度も預言者を通じて民に呼びかけますが、人々はこれを無視し、自分たちの繁栄を追い求めます。偉大な王が現れ、国は経済的に繁栄し、国力は増しました。エジプトの国で奴隷という屈辱的な地位にいた民とは思えないほどに栄えました。神が祝福してくださったから繁栄したのですが、人々は自分たちの力だと思い傲慢になりました。権力者も民も神の言いつけに背き、不正義を行い、弱い者、貧しい者を圧迫してでも、自分たちの繁栄と力を追求めたのです。ですが、人間の繁栄は虚しいものです。出エジプトの出来事から約700年後の紀元前590年頃、神の民の国ユダヤ王国は新バビロニア帝

国によって滅ぼされ、首都エルサレムは灰塵と帰し、人々は敵国の首都バビロンに捕虜として連れて行かれました。

古代世界では、神は、国家神、国家の象徴が「神」です。だから、戦争で国が滅びれば、国家神、民族神への信仰も滅びるのが当たり前でした。しかし、イスラエルの人々が信じた神は違いました。国が滅ぼされ、悲しみのどん底にあった人々に対して、神は力強く働きかけられました。エレミヤ書29章には、神がエレミヤを通して捕囚となった人々に語りかけた言葉が残っています。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、エルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に告げる。家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない。わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。」「バビロンに七十年の時間が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であつて、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。」預言者エレミヤをとおして、神の語りかけを受けた人々は、知ったのです。「滅ぼすことのできる神は救うことができる神。」自分たちの神は、人間が作る国家という枠組みを超えたお方、まことの神であり、支配者であることを確信しました。

3 偶像礼拝

さて、詩編115篇には偶像礼拝を批判する文言があります。4節から8節です。「4 国々の偶像は金銀にすぎず／人間の手が造ったもの。5 口があつても話せず／目があつても見えない。6 耳があつても聞こえず／鼻があつてもかぐことができない。7 手があつてもつかめず／足があつても歩けず／喉があつても声を出せない。8 偶像を造り、それに依り頼む者は／皆、偶像と同じようになる。」人間は自分たちを超えた力に救いを求めます。それは、人間がいつか死なねばならない儚い存在であるからでしょう。死を克服するために超越的力を求め、人間とは異なる能力をもっている自然界の事物に神をなぞらえ、像として造り、それを神々として拝みました。つまり、偶像というのは、人間が自分たちの都合がいいように造り出した神々だと言えます。人間に自分たちを救う力がないのだから、人間が造り出した神々に人間を救う力などありません。偶像礼拝とは、神々を拝んでいるつもりで、人間が造った神々を拝んでいる、つまり、人間、自分たちを神として拝んでいる…とも言えると思います。

この偶像礼拝したがる私たち人間の習性を政治に利用し民衆を治めようとするのが古代の権力者のやり方でした。しかし、古代だけではありません。それは現代世界でも行われています。他の民族よりも卓越して優秀である…という偶像のような自民族のイメージを作り出し、「我が国こそ世界を支配する神の国だ！」として、世界に喧嘩を売ったのが、ナチス・ドイツであり、日本帝国でした。ナチス・ドイツも日本帝国も、人間にすぎないドイツ人、日本人の国です。しかし自分たちの民族こそ「神だ」として、他民族を侵略したのです。

しかし、聖書の神は、そんな偶像ではありません。山や川、太陽や月や星など自然の事物に例えられるようなお方ではありませんし、勿論、人間でもありません。この全宇宙とそこにすむすべての命、そこに現れるすべての事物を造られた方、宇宙よりも大きいお方なのです。それが、弱小の民イスラエルが見出した神でした。その宇宙よりも大きい創造主が、儂い命を生きる被造物・人間を愛し、人間と交わり、救おうとしてくださいます。「自分たち人間ではない、自分たちではなく、このお方にこそ、死を超える力がある、人を救う力がある。」それこそ神の民の信仰、聖書の語る神への信仰です。聖書の信仰は、人間というものをよく知った、深い知恵に裏打ちされています。だから、神の民は繰り返し詠います。「わたしたちではなく、わたしたちではなく、あなたの御名こそ、栄え輝きますように」

4 主の祈り

主の祈りもそうです。イエスさまが「このように祈りなさい」と教えてくださった、最初の祈り「御名をあがめさせたまえ。」の「あがめる」というのは、「聖とする」という意味があります。「聖とする」とは、わたしたち人間とは決定的に異なることを深くわきまえるということ、「神を神とする」ことだと言えます。つまり、「御名をあがめさせたまえ」というのは、自分たちは神ではありません！という宣言ともいえます。旧約聖書に裏打ちされた深い知恵が基本にあります。「自分達は、神ではありません、あなたに生かされてある者です、あなたのいつくしみによって生かされている者です」という告白とも言えます。そのように告白し、自分たちを神として驕り高ぶるのではない、自分たちがどんなに力が強く富み栄えていたとしても、自分たちの力でなしたことではない、神が祝福して与えてくださったものであると考える、神に対して誇るものなど何もないことを認めて、み前にへりくだるのです。また、自分たちがいかに貧しく小さいとしても不安になったり卑屈になることなく、全能の神の宝の民だという喜びをもって、「自分たちは、全能の神の御名を崇める民です」という告白でもあります。全幅の信頼と喜びをもって告白し宣言するのです。それが「父よ」という呼びかけに現れています。天地万物を造ったお方、死を超えるお方がわたしたちの父としておられる。だから、わたしたちは幼子としてこのお方から養われる者。自分たちで

高ぶり、栄光を握り締めるのではなくて、神に栄光をお返しする。それが、神を神とすることです。

5 隣人愛

では、どこでどのような面で、神がわたしたち人間とは決定的に異なり、神が神であることが明らかとなるのでしょうか。ルカ福音書では、主の祈りが、「よきサマリア人の喩え」、「マリアとマルタのエピソード」の後に置かれています。この流れが大切ではないかと思います。

有名なよきサマリア人は、敵であるわたしたち人間を愛してくださるイエスさまだと7月の礼拝で取次ぎました。神から造られた同じ命なのに、民族の違いを言い立てて、民族の間に隔てを造り憎み合うわたしたち人間。自分たちの利益を守るためなら、よその弱い者、小さいもの、貧しい者を犠牲にしてもいい…とってしまうわたしたち。そうしてすべての命を造った神の敵となるわたしたち。そんなご自身の敵であるわたしたちを深くいつくしみ愛してくださる神。それこそ、敵であるユダヤ人の窮地を助けたサマリア人に喩えられた主のお姿です。主イエスは、敵を愛するご自身に例えたサマリア人の姿を通して、わたしたちに、自分たちによくしてくれる人だけを愛するのではない、自分たちと同じ人々だけ、同じ民族だけを愛するのではない、異なる人々をも愛なさい…と教えてくださっています。この主のみ言葉を主の足元で弟子として聞き、そして主イエスに倣い、神の愛を広げて行きなさい…という主の教えをマリア・マルタのエピソードを通して私たちは聴きました。つまり、ルカ福音書は、敵をも愛する愛に神がわたしたち人間とは根本的に異なり、神が神であることの中核、神の本質があるとしています。だから「父よ、御名を崇めさせ給え」で始まる主の祈りをここに置いているのではないのでしょうか。

6 Pay forward 「恩送り」

さて、先週の木曜日から土曜日まで、群馬県の水上バイブルホームというところで行われた関東地区ティーンズキャンプに高橋姉と共に行ってきました。私はディボーションタイムのショートメッセージを担当したのですが、そこで参考にした本がありました。塩谷直也牧師の「19歳からのキリスト教」という本です。その中に「恩送り」という面白い言葉があるので、紹介します。

育ててくれた親をはじめ、自分に親切にしてくれた人たち、愛してくれた人たちを愛し返すこと、恩返しすることは大切なことです。「恩返し」を英語でいうと、「PayBack」。相手に頂いた愛を返す、戻す、それが「恩返し」。大切なことですが、相手に戻すだけだから広がりがありません。例えば、相手と自分という当事者どうしだけで「愛」というボールをやり取りするキャッチボールのよう。もらったものを返すやり取り。

しかし、主イエスの語られる「隣人愛」はそうではありません、自分を愛してくれない人、大切にしてくれない人に愛を渡すことです。自分が誰かにされた親切を、その当事者に返すのではなくて、全く別の人に渡す、PayBackではなくて、PayForward だということです。愛を前に、先に、自分に親切にしてくれない人々に送ることこそ、主イエスのおしゃっていることだ…ということです。そのとおりだと思います。本当にそのとおり。

しかし、それが案外に難しく、自分たちの力だけでは出来ない…それは人間の歴史をみれば明らかです。渡す相手がよい人で、自分に危害を加えないのであれば、恩送りもできるでしょう。状況がよい時はPayForwardで愛はひろがっていくえしょう。しかし、周りが敵だらけの時、自分によくしてくれる人がいない時はどうでしょうか。敵に親切にできるでしょうか。「Pay Forward」をどんな状況でもきちんと行うためには、私たちの力だけでは足りません。決定的に足りません。わたしたちは、わたしたちの力だけでは、自分に親切にしてくれない人、いや自分に害をなすような人にまで愛を渡すことはできません。

だからわたしたちはそこで叫びをあげるのです。「わたしたちでは出来ません。天の父なる神よ、あなたに背を向け、自分たちを神とし、あなたの敵となったわたしたち。そうして滅びるしかない儚い命に生きる者となったわたしたちの悲しみをご自身のものとされた神よ、あなたは、わたしたちのためにひとり子を送ってくださった。あなたの何よりの喜び、何よりの誇りであるひとり子イエスさまをわたしたちの身代わりに死にわたし滅ぼした。そうして、わたしたちを敵を愛せず憎しみ合うしかない不自由さから解き放ってくださった。だから、敵を愛するための力も知恵もない、愛もない私たちを憐れんでください、天の父なる神さま！助けてください、わたしたちではなく、あなたの御名を聖とし、御名を大きくします、あなたの御名を呼び求めます、どうか、わたしたちにキリストの霊をお与えください！」と祈り叫ぶのです。主の祈りの冒頭「父よ、御名が崇められますように」という願いは、父なる神への私たちのそういう叫びともいえます。

7 74回目の敗戦記念日

もうすぐ74回目の敗戦記念日が来ます。21世紀になってから、太平洋戦争中の日本帝国の犯した数々の戦争犯罪の歴史を語ると、「私たち日本人がそんなひどいことをする筈がない。中国人や韓国人は随分と誇張して言っているのだ。日本人が日本の戦争犯罪を語るのは、自分たち日本民族を過剰に貶める自虐史観だ。」と声高に非難する人々が増えてきました。しかし、自分たちの犯した過ちを冷静に振り返ることは、自虐的でしょうか。日本人だからと言ってわたしたちは神ではないのです。間違うのです。天使のようになれば、悪魔のようにもなる人間なのです。74年前、この世界はキリスト教国も含めて、全世界で愛のペイフォワードではなくて、憎しみのペイフォワードを

してしまいました。そして世界大戦に突入しました。日本はドイツやイタリアと共に、悪意の Payfoward を率先して行ったのです。この現実の歴史を見ないふりをして日本人は美しい国、天皇を父と仰ぐ神の国だ…とすることこそ、自らの破滅をもたらすこと、74年前と同じ失敗を繰り返すことだとわたしは思います。わたしたちは、神ではない、自分たちだけの正義を求め、自分たちだけの富と栄を求め、小さい人たち、弱い人たちの犠牲をも見ないふりをする者たち。その点においては、国境はありません。日本人も、韓国人もない、アメリカ人もドイツ人もない民族的な差異などないのです。だからこそ、主イエスは、すべての人のために来てくださったのです。悪に悪を返してしまうすべての人間のために、自分たちが神になろうとするすべての民族のために、主イエスは来てくださいました。そうして、十字架の上でわたしたちの罪ゆえに死んで罪を贖い、三日目に甦り、罪に打ち勝つ神の愛の力をわたしたちに示してくださいました。そしてそのイエス・キリストは、信じる者の心に住んでくださり、今も働いてくださいます。いつ働いてくださるのでしょうか？

父なる神を求めて叫びをあげる時です。「父よ、御名を崇めさせ給え、御国をきたらせたまえ」と叫ぶところ、叫ぶ時です。そこでその時キリストが働いてくださいます。だからこそ、わたしたちは、キリストから受け取った愛を他の人々に渡すことができます。わたしたちにはできませんが、わたしたちの内に働くキリストが渡してくださるからです。

「平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」そのように宣言してくださったイエスさまは、今も生きて働きわたしたちを導かれる平和の主です。この方に従うこと以外に平和への道はありません。わたしたち横浜ナザレン教会は、主の祈りを叫び祈りつつ、この平和の君にお従いしていきましょう。